高山の文化を高めた人々 53

桜井幸子先生を偲ぶ

藤江　久子

桜井先生との最初の出会いは、友人が選挙の告示間際になって紹介して下さったのがきっかけでした。地元出身でない、そして基盤のなかった私には責任ある役の引き受け手がなかったのです。当時私は、せっかくなっても良いと言って下さった先生に「どうして引き受けて下さったのですか?」と聞いてしまいました。すると「あなたが看護師だから」と痛快な答えが返ってきました。その当時を思うと、今でも涙が出てきます。

先生の御尽力にもかかわらず、この選挙で私は落選してしまいました。しかし、その涙も乾かない翌日から先生は私をいろんな所に連れて行ってくれました。しばらくして「歌人クラブ」に入会した私は、先生の瑞々しい感性に改めて感動しました。とても八十歳を前にした方とは思えない歌が泉のごとく湧き出てくるのです。

「先生はどうしてそんなにいつまでも、生き生き輝いていられるんでしょうか」と尋ねた事があります。すると「原爆後の看護で被爆し亡くなった友人たちの分まで生きなくちゃいけないから」と答えが返ってきました。

広島に原爆が投下された昭和二十年八月六日の午後、日赤の看護師を乗せたトラックが呉海軍病院を出て広島に向かいました。その中に先生とその友人たちが乗っていました。先生は当時の状況を次のように歌っています。

夜を徹し被爆者を看(み)しヒロシマが私の心にずっしりと在る

先生の原点は被爆体験です。亡くなる直前まで歌を詠まれたのも「私が死んだら誰も私たちのこと知らんようになる。だから歌に残しておきたい」と言う思いからでした。

そして帰郷後、市内の病院の看護師を経たのち、助産院を開業され約三千人のお産を手掛けられ、新しい命に向き合う中、歌人としての先生の歴史が刻まれていきました。

桜井先生は、昭和二十一年大埜間霽江(おおのまさえ)主宰の飛騨短歌会に入会し、都竹豊治氏、老田清子氏、今寺修二氏等と飛騨短歌会の一時代を築きましたが、新しい短歌をめざし春日井健主宰の中部短歌会に入会し、鉈彫同人、日本歌人クラブ、中部歌人会、岐阜県歌人クラブの運営委員として活躍されました。

飛騨短歌会の解散後、県歌人クラブの支部として歌人クラブ・高山を発足させて後進の指導にもあたられました。

「井の中の蛙になるな」が持論で、自らも名古屋、岐阜方面の歌会にも参加する中で、飛騨の四季や暮らしを発信し、飛騨の歌人としての高い評価を得られています。中でも、一九九七年より始まった古今伝受の里として名高い郡上大和で開催される『歌となる言葉とかたち』という、歌人がつくった歌を造形作家が形にするといったプロジェクトの中で、有名歌人たちと名を連ね、代表作品をつくられました。

定置網の方形くぐり流れゆく波はあしたの光集めて

雪解水溜りて写る綿雪に少し倖せ貫いて帰らな

等があります。

また、歌集としては『紅』『彩なして』を上梓されています。

かつてわが戦艦大和の兵見しを夫にも子にも語りしことなし

という平井弘氏をして驚かせた一首があります。晩年になり詠み始めた「歴史の証言としての短歌」の語り部として桜井幸子先生を、朝日新聞が大きく取り上げたことがありました。桜井先生が今、ご存命であるなら「ひろしま」ならぬ「ふくしま」をどのように感じられたのでしょうか。

病臥してかの夏思う艦伊勢の兵の足垢落としてやりぬ

お亡くなりになる数日前に詠まれたこの歌が遺詠となりました。

市内の病院に勤務していた頃

また、飛騨にホスピスをつくる会など社会活動にも積極的に参加され、看護師や助産師だけでなく社会にも大きな影響を与え続けました。その先生のエネルギーの源はこよなく愛してくれる御主人の愛だったと思います。時々そう言って冷やかしてみたりしたのですが、「夫は私が死んだら後を追うと言っているのよ」と自信満々にお話しされました。

被爆者であり、癌の手術もされ、リウマチもあった先生。最後は胆管がんで二週間入院され平成二十二年五月にお亡くなりになられた先生。一年前から食欲がなくなって体力も低下されていましたが、私達に微塵も悟られることなく、最後まで見事に生き抜かれました。

私が申し上げるのは大変おこがましいのですが、一人の歌人であり、看護師であり、助産師であり、そして輝かしい女性であった桜井幸子先生のあとを、みんなで続いていきたいと思っています。

最後に、先生の歌集にこんな一首を見つけました。

ふるりんと鈴蘭咲く道歩みゆく本町二丁目わが生れし町